

コロケーションにおける同義語の代用性に関する一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松野, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008792

コロケーションにおける同義語の代用性に関する一考察

松野和子（静岡大学 大学教育センター）

1. はじめに

Firth (1957) によれば、コロケーションとは慣習的に共に用いられる語のまとまりである。

Collocations are actual words in habitual company.

[Selected Papers of J.R. Firth 1952-59, p.182]

表現がコロケーションであるかを判別する基準は多様であり、その中の1つに同義語の代用性がある (Gitsaki, 1999; 松野・杉浦, 2004; 松野, 2014)。本稿は、以下(i)(ii)の観点から、同義語の代用性がコロケーションの判定基準として不十分である可能性を議論する。

- (i) 判別に採用する同義語の特定
- (ii) コロケーションの心的実在性

また、本稿では、(i)(ii)の分析に基づき、同義語との代用が不可能な語を含む表現を対象とした外国語学習についても再検討する。

2. 判別に採用する同義語の特定

2.1 コロケーションの判別と同義語の代用

語と語の共起関係は、(a) 統語によって制限される場合、(b) 語の持つ意味によって制限される場合、(c) 恣意的に制限される場合があるが、(a) 統語や (b) 語の意味による制限ではなく、(c) 恣意的に共起される語が決定され、語の選択が行われる表現は慣習的に語の組み合わせが決まっているといえる (Allerton, 1984; Cowie, 1998; Cumming, 1995; Greenbaum, 1970; Lehrer, 1974)¹。同様の意味をもつ語と語のはずが、一方は使用できず、他方の語

のみが選択されるのは表現のされ方が恣意的に決まっているためであるとの考えに基づき、同義語との代用が不可能な語を含む表現はコロケーションと考える立場がある (Gitsaki, 1999; Granger, 1998)。

Carter and McCarthy (1988) によれば、*strong* と *powerful* は同義語であり、*strong* を含む表現がコロケーションであるかを判別する際に、*strong* が *powerful* と代用可能かが試験される。例えば、両者とも *man*, *steel*, *argument* と共に用いることができる一方で、「濃いお茶」の意味で *strong* と *tea* を共起させることができるが、*powerful* と *tea* は共起させることはできない。そのため、同義語の代用性によってコロケーションが判別される場合、*powerful* と代用可能な *strong man*, *strong steel*, *strong argument* はコロケーションに分類されない一方で、*powerful* と代用不可能な *strong tea* はコロケーションに分類される。

2.2 代用する同義語の選定における不明瞭さ

Firth(1952)は、ある語の全ての意味を網羅する同義語は存在しないため、コロケーションの判定基準として、同義語の代用性は不十分であると指摘する。

There is no doubt about its unique position nor about the inadequacy of any so-called synonymous substitution.

[Selected Papers of J.R. Firth 1952-59, p.22]

例えば、多義語である *get* はその使用される意味によって、以下の(a)から(i)のすべてが同義語となり、(a)から(i)の単語を1つ選択して *get* の意味す

べてに代用させることはできない。

Some of these words may be substituted for “get” in collocations, the distribution of which may be marked by formal structure, but by no means all.

- (a) have, hold, possess, grasp, grip, catch;
- (b) secure, obtain, procure, acquire;
- (c) earn, profit, gain;
- (d) am, is, etc., grow, become;
- (e) progress, advance, arrive, reach;
- (f) obliged, force, forced;
- (g) succeed, surmount, subdue, defeat, overcome, overpower;
- (h) contrive, extricate, insert, apply, escape, avoid;
- (i) learn, understand, express

[Selected Papers of J.R. Firth 1952-59, p.23]

同義語の代用性に基づいて、*get* を含む表現がコロケーションであるかを試験する際、上記のうち、どの語を選定してコロケーションの判別を行えばよいか確然としない。

第 2.1 節のように、Carter and McCarthy (1988) では、*strong* の同義語として *powerful* が採用された。しかしながら、*strong* の同義語として、*powerful* ではなく、*forceful*, *vigorous*, *fierce*, *intense* を挙げることも考えられる。ある語に対する同義語が複数存在する場合、(a)任意の一語との代用性を試験すればよいのか、(b)特定数の同義語で試験する必要があるのか（特定数の語をどのように選定するのか）、(c)全ての同義語を対象に代用性を試験する必要があるのか、同義語の代用性に基づいてコロケーションを判別する際、同義語の選定基準が明確ではない。Carter and McCarthy (1988) では、*strong* に対する同義語として *powerful* のみが選定されたが、複数の同義語を持つ *strong* に対して *powerful* 一語との代用可能性のみでコロケーシ

ョンを判別することが妥当であるのか検討する余地がある。

加えて、文脈によって、ある語に対する同義語が変わる可能性があり、*strong* と *powerful* が *argument* と共に用いられた文脈で同義語だとみなされても、他の文脈では *strong* と *powerful* は同義語とみなされない可能性がある。例えば、*strong tea* における *strong* の同義語は、「程度の大きさ」を表しているという点で、*big*, *high*, *heavy*, *thick*, *loud* 等を選定するほうが *powerful* を選定するよりも妥当だと考えられるかもしれない。また、液体が「濃い」という意味では、*potent*, *concentrated*, *undiluted* が同義語とみなされる可能性がある。Carter and McCarthy (1988) は、*tea* と共に用いる文脈において *strong* の代わりに *powerful* が使用できないことに基づき、*strong tea* では恣意的に語(*strong*)が選択されていると判定して *strong tea* をコロケーションとみなした。しかしながら、*strong tea* において、*strong* を *powerful* に代用することは不可能だが *potent* とは代用可能な場合に、*strong tea* をコロケーションと判別してよいか一貫した帰結は得られない。ある語が使用される文脈をどのように解釈するかによって選定される同義語が変わり得ることが分かる。(a)中心的な意味が同義である語によって試験するのか、(b)文脈に合わせた同義語によって試験するのか、(c)文脈に関わらず同意語となり得るすべての語を対象に試験するのか、確立した基準はなく、コロケーションの判別に同義語の代用性を採用する場合、代用する同義語の選定方法が不明瞭である。

このように、コロケーションの判定基準としての同意語の代用性では、複数存在する同義語の中でどの語を選定して、コロケーションの判別試験を行えば妥当であるかについて明瞭な基準がなく、抽出されるコロケーションの再現性が低くなる。同意語の代用性はコロケーションの判定基準として不十分であると考えられる。

2.3 同義語の識別における不明瞭さ

本節では、認知意味論的視点から、コロケーションの判別に採用する同義語の特定について検討する。語の意味は、プロトタイプ(中心的意味)とコア(意味を網羅する概念)から成る(田中, 1990)。中心的意味ではない語義は中心的な意味を軸に、心的イメージに沿いながら広がっていき、語は多義となる(田中, 1990)。例えば、(1)の用例のように、*run* の意味には「走る」だけでなく、「(水が)流れる」「(鼻水が)垂れる」「(ストッキングが)電線する」などがある。

- (1) a. A person is running.
 b. Water is running.
 c. My nose is running.
 d. Your stockings are running.

1つの単語 *run* 内に複数の意味が存在するが、それぞれの意味は独立して個別に存在するのではなく、*run* のそれぞれの意味に共通する概念が存在する。田中(1990)によれば、多義語 *run* すべての意味を網羅する概念(*run* の語義のコア)として、「物質的・心理的・時間的空間を(1)一方向性をもって、(2)連続的に、なめらかに、途切れなく、(3)相対的に速い、(4)一定の速度で、(5)動く」という概念が共通して存在している(p. 35)。

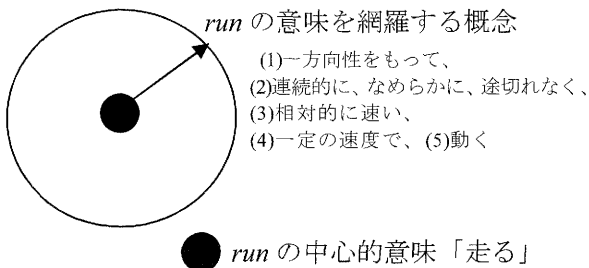


図 1. *run* の中心的意味と意味を網羅する概念

run の意味は多義であるが、その中心的意味を軸に、意味を網羅する概念に沿うように、それぞれの意味(例: 「(水が)流れる」「(鼻水が)垂れる」「(ストッキ

ングが)電線する」)が広がっている。コア(意味を網羅する概念)は、Lakoff and Johnson (1980)のいう「慣習化された心的イメージ」(conventional mental image)と言い換えることもできる。中心的意味が同じである語 A と語 B でも、中心的意味からどのように意味が広がるかが異なる。つまり、語 A と語 B が同様の意味を共有していても、語の意味に内在している慣習化された心的イメージは異なり、語 A と語 B は意味概念が完全に一致しないことになる。

powerful の心的イメージ

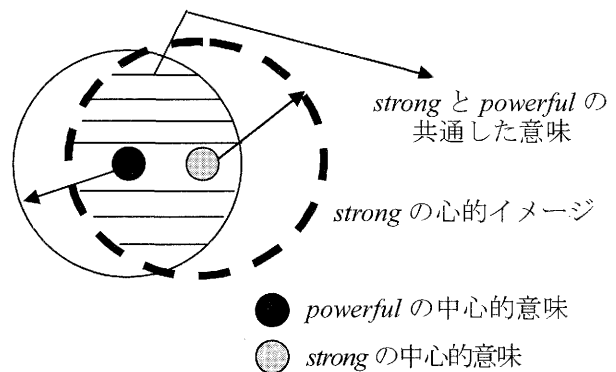


図 2. 同義語間の中心的意味と心的イメージ

例えば、図 2 のように、*powerful* と *strong* は共通した意味を有している語であるが、それぞれの語の意味に内在している慣習化された心的イメージは異なっており、*powerful* と *strong* は完全に同一の意味概念を持つ単語ではない。

コロケーションの判定基準として同義語の代用性を採用した場合、同義を共有している語同士でも、完全に同一の意味概念を持つわけではない。同義語の識別基準として、(a) 完全に意味概念が一致しなければ同義語とみなされないのか、(b) ある程度意味概念が一致していれば同義語とみなされるのか、(c) どの程度の意味概念が一致していれば同義語とみなされるのか、その指標が曖昧である。どのように同義語を識別するのかについて明確な基準がなく、代用に採用する同義語の特定方法に一貫性がないことから、同義語の代用性はコロケーションの判定基準として不十分であると考えられる。

3. コロケーションの心的実在性

3.1 コロケーションの記憶表象と同義語の代用

コロケーションは、その表現を構成する語 A と語 B がひとまとまりで記憶されている表現と考える立場がある(Singleton, 2000; Sosa & MacFarlane, 2002; Van Lancker, 1975, 2004)。

... a collocation is "stored as a unit,"...

(Van Lancker, 1975, p. 140)

言い換えれば、コロケーションは心的実在性に基づいて定義される(Hoey, 2005)。

Collocation is fundamentally a psychological concept... (Hoey, 2005, p.7)

第1節でみたように、コロケーションとは慣習的に共に用いられる語のまとまりを指すが、Aijmer and Altenberg (1991)によれば、心的辞書の大部分は、慣習的に共に用いられる語のまとまりから成っている。つまり、心的辞書内には、多くのコロケーション情報が記憶されていると考えられている。

A large part of our mental lexicon consists of combinations of words that customarily co-occur. (Aijmer & Altenberg, 1991, p. 112)

Erman and Warren (2000)は、同義語間で言い換えができない語で構成される表現は、同様の意味を持つ語のうちどの語を用いるかについて知識がないとその表現を産出できないため、表現パターンが心的に記憶されていると主張する。

A prefabs is a combination of at least two words favored by native speakers in preference to an alternative combination which could have been equivalent had there been no conventionalization. ...at least one member of the

prefab cannot be placed by a synonymous item without causing a change of meaning or function and/or idiomaticity. (Erman & Warren, 2000, pp. 31-32)

Erman and Warren (2000)によれば、同義語の代用性に基づいて抽出されたコロケーションは、その表現パターンが心的に記憶されていることになるが、第3.2節と第3.3節では、同義語と代用不可能なことを根拠に、その表現パターンが心的に記憶されているとは必ずしもいえないことを議論する。

3.2 語に内在する意味概念による語選択

本節では、表現パターンを心的に記憶していなくても、語の意味概念によって、同義語との代用が不可能な語を含む表現の産出が可能であることを示す。

言語によって事象を表現する際、多くの事象がメタファー(たとえ)を用いて言い表されている(Lakoff & Johnson, 1980)。メタファーによる事象の言い表し方は固定されており、どのように言い表すかが慣習的に決まっているため、ほとんどそれがメタファーであるとは感じられない(Lakoff & Johnson, 1980; Whorf, 1941)。そのため、背後にメタファーが存在していると知ると、事象のすべてがありのままに表現されておらず、ある側面に焦点が当てられて表現されていることが分かる(Lakoff & Johnson, 1980)。

例えば、以下の(2a)から(2b)のように「秘密にしておくはずの情報を伝えてしまう(=情報を漏らす)」ことは、英語において液体を漏らすことにたとえられ、*leak*(「～を漏らす」)を用いて言い表される。また、以下の(2c)から(2e)のように「包囲や封鎖をなくす(=包囲・封鎖を解く)」ことや「禁止・制裁など抑圧していたものをなくす(=抑圧していたものを解く)」ことは、壁のように立ち塞がっていた包囲や封鎖・禁止・制裁を持ち上げて、その壁をなくすことにみたとえられ、*lift*(「(物体)

を持ち上げる」)を用いて言い表される。

- (2) a. These pipes leaked water.
b. They leaked the fact / the information.
c. They lifted a table.
d. They lifted the siege / blockage.
e. They lifted the ban /
the economic sanction / the price control.

第 2.3 節でみたように、語の意味は心的イメージに沿いながら、メタファーの原理に基づいて中心的な意味を軸に広がっていく (田中, 1990)。例えば、図 3 のように、*lift* の意味は、中心の意味(「(物体)を持ち上げる」)から心的イメージに沿って、「(包囲・封鎖)を解く」「(禁止・制裁など抑圧していたもの)を解く」へと広がっている。

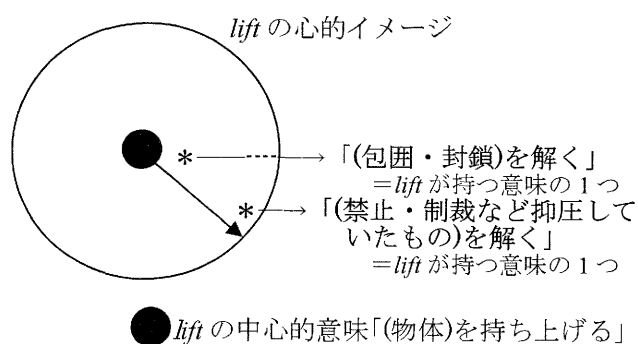


図 3. *lift* の中心の意味と意味の広がり

言い換えれば、*lift* が持つ意味概念として「(包囲・封鎖)を解く」や「(禁止・制裁など抑圧していたもの)を解く」があるため、これらの事象を言い表す際は *lift* という単語が用いられる。

同様に、*strong tea* における *strong* は程度の大きさを表すメタファーと捉えることができる。程度の大きさは、「強さ・弱さ」や「高さ・低さ」、「重さ・軽さ」、「厚さ・薄さ」等にたとえられて、その言い表し方が決まっている。一例として、英語では、(3)のように、(成分を多く含んでいるために液体が)濃いことは「強さ」、価格・値段などが高いことは「(空間的な)高さ」、(悪い習慣を対象に)

多くを摂取したことは「重さ」、液体が濃厚なことは「厚さ」、(色・模様・衣類などが)派手なことは「音量」にたとえられて言い表される。

- (3) a. strong tea / coffee
b. high salary / cost / price
c. heavy smokers / drinkers
d. thick syrup / honey / gravy
e. loud colors / ties / dresses

つまり、(成分を多く含んでいるために液体が)濃いことを言い表すには *strong*、価格・値段などが高いことを言い表すには *high*、(悪い習慣を対象に)多くを摂取した人に対して *heavy*、液体がどろどろして濃厚なことは *thick*、(色・模様・衣類などが)派手なことを言い表すのに *loud* を用いることが慣習的に決まっている。単語 *strong* の意味に「(成分を多く含んでいるために液体が)濃い」が含まれており、*high* の意味に「(価格・値段などが)高い」、*heavy* の意味に「(悪い習慣を対象に)多くを摂取した」、*thick* の意味に「液体がどろどろして濃厚な」、*loud* の意味に「(色・模様・衣類などが)派手な」が含まれているため、これらの語が使用されるのである²。*strong* は *tea* だけでなく *drink*, *brew*, *coffee*, *cappuccino*, *espresso*, *mocha* 等の飲み物と共起し、飲み物が濃いと表現できることから *strong* 自体の意味概念に「(成分を多く含んでいるために液体が)濃い」が含まれていることが分かり、意味概念に基づいて *strong tea* の産出が可能なが分かる。このため、*strong tea* の表現パターンが1つのまとまりとして心的に記憶されていなくても、*strong* 自体の意味概念に基づいて、*strong tea* を産出することが可能であるといえる。

このように、同義語と代用が不可能な表現でも、語に内在する意味概念に基づき、その表現を産出することは可能であり、同義語の代用性を根拠に表現パターンが心的に記憶されているとは主張できない。

3.3 語に内在する意味概念による同義語の代用不容認

本節は、同義語間における代用の不容認は、表現パターンが心的に記憶されていることに限らず、語の意味概念によっても実在化させ得ることを示す。

Strong と同義を持つ *powerful* を例とすると、図4のように、*strong* の意味は、その中心的意味から心的イメージに沿って「(成分を多く含んだ)濃い」という意味へと広がるが、*powerful* では「(成分を多く含んだ)濃い」という意味へ広がらない。*Strong* は、「(成分を多く含んだ)濃い」をその意味として含むが、*powerful* には含まれないため、両者とも「強い」という意味を共通して持つものの、*tea* に対して *powerful* は使用されず、*strong* が使用されることとなる。

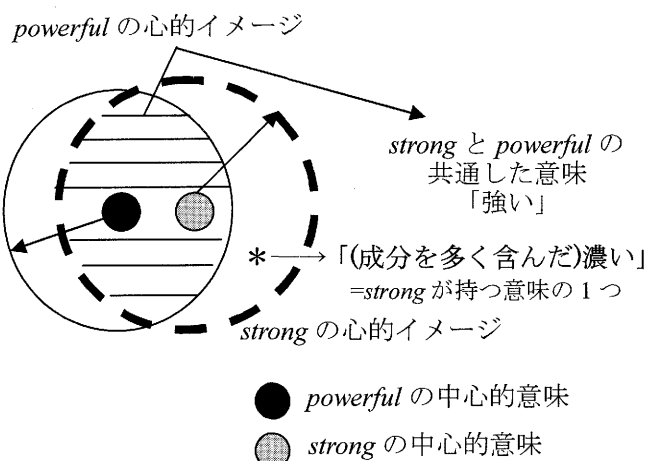


図4. *powerful* と *strong* の意味の広がり

Strong tea における *strong* は同義を持つ *powerful* と代用できない。しかしながら、*strong tea* の表現パターンが1つのまとまりとして心的に記憶されていないと、*strong tea* の代わりに *powerful* を選択し、*powerful tea* が産出されることとなるとはいえず、*strong* 自体の意味概念に基づいて、*powerful tea* の産出を排除し、*strong tea* の産出が可能となる。

(a)単一の語(語 A)に内在している慣習化された意味概念に基づく語選択と(b)語の意味による制限ではなく語 A と語 B の共起が恣意的に決まっていることに基づく語選択は、慣習性の性質が異なる。

コロケーションとは慣習的に共に用いられる語のまとまりであると定義されるが、(a)と(b)の表現を混同せず、コロケーションを判別する必要があると考えられる。

同義語間で代用不可能な表現を構成する語 A にその事象を表す意味が含まれているため、表現パターンを記憶していなくても、語 A の意味を引き出すことによって表現を産出できることをここまで考察してきた。同一の表現でも使用頻度や共起頻度の高さ等の他の要因によって表現パターンが記憶されている可能性はあるが、同義語との代用性を要因として表現パターンの心的実在性が決定されるわけではない³。例えば、*strong tea* が高頻度で使用される場合は使用頻度を要因として表現パターンが記憶されている可能性があるが、*strong tea* を産出する際には、*strong tea* という表現パターンを記憶しておかなくても *strong* の持つ「(成分を多く含み)濃い」の意味と *tea* の意味である「お茶」を組み合わせることによって、「濃いお茶」を表現でき、同義を持つ *powerful* を共起させた *powerful tea* は産出されない。このように、同義語間で語の代用ができない表現では、表現パターンを必ずしも記憶していなくても、その表現を産出することができ、同義語間で語の代用が不可能だからといって、表現が心的に記憶されているとはいえない。コロケーションはその表現パターンが記憶されているものであると考える場合、同義語の代用性はコロケーションの判定基準として妥当ではないと考えられる。

4. 同義語との代用不可能な表現と外国語学習

4.1 母語と目標言語間の「同義語」の特定

語の選択制限があり同義語間で一方の語のみが使用される表現において、学習者は誤った語を選択してしまうことが多い(Howarth, 1998; James, 1998; Pawley & Syder, 1983; Shei & Pain, 2000)。同義語間で代用不可能な語を誤って選択する要因と

して、母語の転移が大きく影響することが明らかになっている(James, 1998; Kuiper & Lin, 1989; Nesselhauf, 2003, 2005)。

James(1998)によれば、母語の思想体系を用いて目標言語を産出するため、母語と目標言語の思想体系に相違がある場合、誤った語の選択が起こる。例えば、英語では年齢を「高さ」ととらえず *old age* と表現するが、ドイツ語では年齢を「高さ」ととらえて表現するため、ドイツ語を母語とする英語学習者は *high age* と表現することが多い。Farghal and Obiedat (1995)では、*strong tea* と表現する課題において、母語であるアラビア語と同様の語の結びつきとなる *heavy tea* を産出する学習者が多く観察された。また、ドイツ語では、「宿題をする」は動詞として *machen (= make)* が使用されるため、*do* と *homework* を共起させるのではなく *make* と *homework* を共起させるドイツ人英語学習者が多く観察された(Nesselhauf, 2003)。

日本語では、茶の成分が多く含まれていることを「濃いお茶」と表現し、色の濃淡と捉えて程度の大きさを表現する。*Deep color, deep red, deep blue* 等、英語では色が濃いことを「深さ」にたとえて表現することができるが、これを「濃いお茶」に応用した *deep tea* は誤用となる。また、霧が濃いことは *dense fog* と表現され、密度が高いと捉えられるが、濃いお茶の意味で *dense tea* とは言い表せない⁴。このように、「濃い」と同義になる英単語を抽出しようとする場合、*deep, dense, strong* 等が候補となり、一単語をもって完全に同一の概念を表すことはできない。一方、*strong tea* と表されるように、日本語で「強いお茶」と表現すると不自然な言い回しとなる。

「強い」の心的イメージ

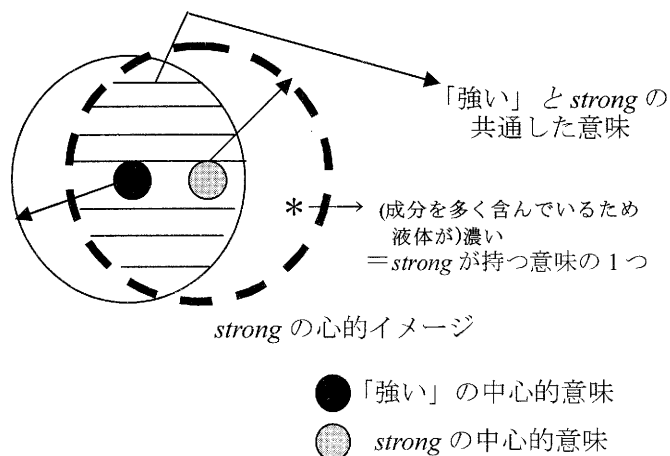


図5. 「強い」と *strong* における意味の広がり

図5のように、共通の意味を有する「強い」と *strong* では意味の広がりが異なる。第2節では、母語内で同義語の特定が不明瞭であることを考察したが、母語と目標言語間でも、ある語同士において意味の共通部分があっても、それらの語の意味が完全に一致するとは限らない。そのため、同義語と代用不可能な表現の学習では、対象言語と母語の語彙を対にして記憶するだけでなく、対象言語における語彙の共起関係、中心的意思と心的イメージの広がり等の意味概念を適切に学習する必要があると考えられる。

4.2 目標言語における表現パターンの心的実在性

Kjellmer(1991)によれば、母語話者が記憶された表現パターンを用いてコロケーション表現を作り上げていく場合でも、学習者では、表現パターンが記憶されておらず、個々の語を組み合わせるため、誤った表現やぎこちない表現が産出される⁵。

In building his utterances he makes use of large prefabricated sections. The learner, on the other hand, having automated few collocations, continually has to create structure... (Kjellmer, 1991, p.124)

[文中の his は native speaker's, he は native speaker を指す。]

外国語教授法の1つである *lexical approach* は、コロケーションを一語一語に分解するのではなく表現パターンとして学ばせることを促している (Lewis, 1993, 1997, 2000)。また、母語と異なる語を用いる表現では表現全体を1つのまとまりとして学んだほうがよいと考えられている (Bahns, 1993; Bahns & Eldaw, 1993)⁶。例えば、「濃いお茶」では、直訳した *deep tea* や *dense tea* が誤用となり、日本語の「強い」に対応する *strong* が用いられるため、*strong tea* の表現パターンを1つのまとまりとして記憶するように促される。同義語間で代用ができない表現の中には、ある現象や出来事を言語によって表現する際の表現方法が母語と外国語で異なるものがあるが、それらの表現では表現パターンを心的に記憶するよう提案されている。

第3節で考察したように、同義語間で代用ができないからといって必ずしも母語話者がその表現パターンを記憶しているとは限らず、一語一語の意味概念を計算して表現を産出している可能性がある。そのため、母語と対象言語で異なる語を用いる表現でも、母語話者が表現パターンを記憶していないものが含まれている可能性があり、母語と対象言語で用いる語が異なる表現は1つのまとまりとして学んだほうがよいと短絡的に結論づけられない。

例えば、*carry* と *penalty* の共起では、同義を持つ *carry* と *bear* の代用が不可能であり、日本語では「罰を運ぶ」と表現されないように、英語と日本語で表現方法が異なる。図6は、*carry* と *bear* の意味の広がりを表したものである⁷。

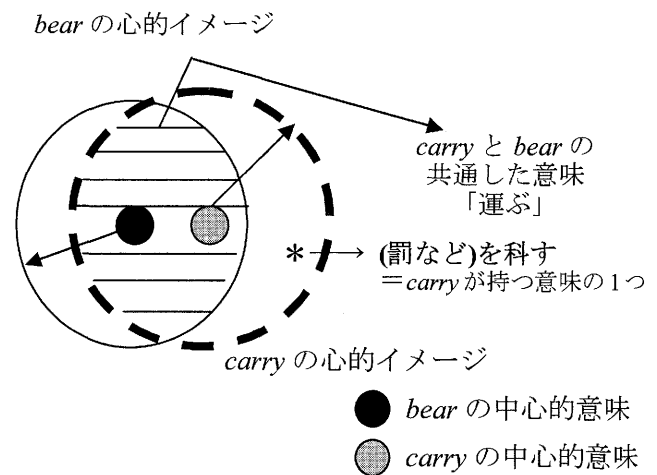


図6. *carry* と *bear* における意味の広がり

意味の共通点がある *carry* と *bear* でも、中心的意思からどのように意味が広がるかが異なるため、「ペナルティを科す」と表現したい場合には、「(罰などを科す)の意味を有する *carry* を選択して *penalty* と共起させることができる。表現パターンを記憶していなくても、*carry* の意味概念と *penalty* の意味概念を組み合わせることによって、表現の産出が可能である。同様に、日本人英語学習者においても、英語と日本語で表現方法が異なっているが、*carry* と *penalty* を共起させるという表現パターンを記憶していなくても、*carry* の意味概念(「罰などを科す」)を習得していれば、表現を産出することができる。そのため、学習者が *carry* と *penalty* を共起させることができない場合に、その表現パターンを心的に記憶していないことが要因であるとは単純にいけない。

このように、同義語間で代用が不可能だからといって、必ずしも表現パターンが記憶されているとは限らず、母語と対象言語の表現が異なっている場合も、母語話者は一語ずつの単語の意味を組み合わせることで表現全体を産出している可能性がある。同義語と代用不可能な表現における誤用は、学習者が表現パターンを心的に記憶していないことだけに起因すると一概に結論づけられない。単語の中心的意思や心的イメージなど単語の意味概念が

習得されていないため、同義語と代用不可能な表現において誤用が起こる可能性もある。今後は、母語話者と学習者における表現の言語情報処理過程や学習者による誤用の要因を明らかにし、同義語と代用不可能な表現に対する学習方法を再検討する必要があるだろう。

5. まとめ

本稿は、以下(i)(ii)の点から、同義語の代用性がコロケーションの判定基準として不十分であることを議論した。

- (i) コロケーション判別に採用する同義語の特定方法が不明瞭である。
- (ii) 同義語と代用できないことを根拠にコロケーションが心的に実在するとは必ずしもいえない。

(i)について、複数個ある同義語において、コロケーションの判別にどの語を選定するかが曖昧であることを議論し、コロケーション判別に採用する同義語の特定方法が不明瞭であると示した。加えて、語Aと語Bが同様の意味を共有していても、語Aと語Bの意味に内在している心的イメージは異なるため、語Aと語Bは完全に一致する意味概念を持つわけではないことを示し、何を同義語とみなすのかという同義語の識別が曖昧である点から、コロケーション判別に採用する同義語の特定方法が不明瞭であることを指摘した。

(ii)について、語の意味に内在する心的イメージの観点から、ある事象を表す意味概念が語Aのみに含まれることによって、表現パターンを記憶していなくても、同義語間で代用不可能な表現の産出が可能であることを示した。つまり、同義語間で代用ができないからといって、表現パターンが記憶されているとは限らず、表現パターンが記憶されているものをコロケーションとみなす場合、

同義語の代用性はコロケーションの判定基準として妥当ではないと考えられる。

本稿では、上記の(i)と(ii)の分析に基づいて、同義語との代用が不可能な表現の学習法について考察した。同義語間で代用ができない表現において、母語と対象言語が異なる語を用いる場合に学習者の誤りが多くなるのは、学習者はその表現パターンを心的に記憶していないからであると先行研究では主張されていた。しかしながら、本研究では、表現パターンが記憶されていないことのみ起因するわけではなく、単語の中心的意味や心的イメージなど表現を構成する単語の意味概念を習得していないことも要因となり得ることが論じられた。今後は、母語話者と学習者におけるコロケーションの言語情報処理過程や学習者による誤用の要因を明らかにし、同義語で代用できない表現の外国語学習法を再検討する必要があると考えられる。

注

*本研究は、平成24年度～平成26年度 科学研究費補助金 若手研究B (研究課題番号:24720252) 「英語学習者と日本語学習者におけるコロケーションの情報処理過程に関する比較研究」による研究成果の一部である。

*本稿は、松野和子(2013)『英語母語話者と日本語母語英語学習者におけるコロケーションの情報処理過程』(名古屋大学 博士論文)の一部を改変した箇所を含む。

- 1) 本研究では、共起を「共に使用されること(co-occurrence)」と定義する。
- 2) *make a promise/a commitment/an engagement, make a mistake/an error* や *take a shower/a bath, take a break/a rest, do harm/damage* など、語A(例: *promise/commitment/engagement, mistake/error, shower/bath, break/rest, harm/damage*)の意味が強く、語B(例: *make, take, do*)の意味がほとんど

失われている(delexical)表現も同様に考えられるかもしれない。語 B は他の同義語と代用できないため、表現パターンが心的に記憶されていると主張されることがあるが、*make* 自体に「(約束)をする」「(過ち)をする/おかす」の意味が内在しており、*take* 自体の意味に「(shower・bath) をする/(シャワー)を浴びる/(風呂)に入る」「(休み)をする/とる」、*do* 自体の意味に「(害)をする/与える」の意味が内在している可能性がある。

- 3) Kemmer and Barlow (2000) によれば、表現パターンの記憶の形成は、どのように言語が使用されるかに基づく。表現パターンの記憶の形成は、言語経験に基づいて形成され、そのパターンが起きる頻度に影響される(Townsend & Bever, 2001)。

Since it is based on experience, this type of learning should be influenced by how frequently specific patterns occur. (Townsend & Bever, 2001, p. 2)

また、高頻度で起これば起こるほど、その表現のパターンは定着し、高頻度の言語表現は記憶される(Becker, 1975; Benson, 1985; Bybee & Hopper, 2001; Ellis, 2000; Macwhinney, 2001; Peters, 1983; Wray & Perkins, 2000)。

...a form becomes stronger when it occurs more frequently. (Macwhinney, 2001, p. 464)

... high frequency phrases are stored in memory ... (Bybee & Hopper, 2001, p. 17)

言語経験に基づいて表現パターンの記憶が形成されるため、表現に接する個人の経験によって、ある個人では記憶されていても他の個人では記憶されていない表現もあると考えられる。Wray (2002)によれば、処理の負荷を軽減させるために、ある表現が必要であることが多いほど、その表現は記憶される。

... the more often a string is needed, the more likely it is to be stored in prefabricated form to save processing effort... (Wray, 2002, p.25)

- 4) 霧が濃いことは、*dense fog* だけでなく *thick fog* とも表され、「厚さ」にたとえられて表現されることがある。現実的ではないが、ペースト状のどろどろした濃厚な状態のお茶を描写する等、*thick tea* と表現される可能性はあるが、*strong tea* と *thick tea* の意味は異なり、*strong* を *thick* に代用することはできない。
- 5) Underwood, Schmitt and Galpin (2004)では、コロケーションを含んだ定型表現 (formulaic sequences)の情報処理過程に関する実験が行われ、Kjellmer(1991)の主張が支持される結果が得られている。
- 6) 外国語教育の立場から、Wood (1993)は、母語と対象言語間で異なる語を用いる表現をコロケーションと判別し、Woolard (2000) は、教育の現場におけるコロケーションとは学習者が予期できない語と語の組み合わせであると言及している。今後は、これらのコロケーションの定義が妥当であるのか検討する必要があると思われる。
- 7) 「コリンズ類語辞典」に基づき、*carry* と共通の意味を有する語として *bear* を例として挙げた。

参考文献

- Allerton, D. J. (1984). Three (or Four) Levels of Word Cooccurrence Restriction. *Lingua*, 63, 17-40.
- Alternberg, B., & Eeg-Olofsson, M. (1990). Phraseology in spoken English: presentation of a project. In J. Apart, & Meijs, W. (Eds.), *Theory and Practice in Corpus Linguistics*. (pp. 1-26) Amsterdam: Radopi.
- Bahns, J. (1993). Lexical collocations: a contrastive view. *ELT Journal*, 47(1), 56-63.

- Bahns, J., & Eldaw, M. (1993). Should we teach EFL students collocations? *System*, 21(1), 101-114.
- Ballow, M., & Kemmer, S. (Eds.) (1999). *Usage-Based Models of Language*. California: CSLI Publications.
- Becker, J. D. (1975). The phrasal lexicon. In *Proceedings of the 1975 workshop on Theoretical issues in natural language processing*. (pp. 70-73).
- Benson, M. (1985). Collocations and Idioms. In R. Ilson (Ed.), *Dictionaries, Lexicography and Language Learning*. (pp. 61-68). Oxford: Pergamon Press.
- Bybee, J., & Hopper, P. (Eds.) (2001). *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*. Amsterdam: John Benjamins.
- Carter, R., & McCarthy, M. (Eds.) (1988). *Vocabulary and Language Teaching*. London: Longman.
- Cowie, A. P. (Ed.) (1998). *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Oxford University Press.
- Cumming, S. (1995). The Lexicon in Text Generation: Progress and Prospects. In D. Walker. *et al.* (Eds.), *Automating the Lexicon*. (pp. 171-206). Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, N. C. (2000a). Frequency Effects in Language Processing. *SSLA*, 24, 143-188.
- Ellis, N. C. (2000b). Reflections on Frequency Effects in Language Processing. *SSLA*, 24, 297-339.
- Erman, B., & Warren, B. (2000). The idiom principle and the open choice principle. *Text*, 20(1), 29-62.
- Farghal, M. & Obiedat, H. (1995). Collocations: A neglected variable in EFL. *IRAL*, 33(4), 315-331.
- Firth, J. R. (1952). Linguistic analysis as a study of meaning. [Reprinted in F. R. Palmer (Ed.) (1968). *Selected Papers of J. R. Firth 1952-59*. (pp. 12-26). London: Longman.]
- Firth, J. R. (1957). A synopsis of linguistic theory, 1930-55. In *Studies in linguistic analysis*. (pp. 1-32). Oxford. [Reprinted in F. R. Palmer (Ed.) (1968). *Selected Papers of J. R. Firth 1952-59*. (pp. 168-205). London: Longman.]
- Granger, S. (1998). Prefabricated patterns in advanced EFL writing: Collocations and formulae. In A. P. Cowie (Ed.), *Phraseology: Theory, analysis and application*. (pp.145-160). Oxford: Oxford University Press.
- Gitsaki, C. (1999). *Second language lexical acquisition: A study of the development of collocational knowledge*. San Francisco: International Scholars Publications.
- Greenbaum, S. (1970). *Verb-Intensifier Collocations in English: An Experimental Approach*. Paris: Mouton.
- Hoey, M. (2005). *Lexical Priming: A New Theory of Words and Language*. London: Routledge.
- Howarth, P. (1998). The Phraseology of Learners' Academic Writing. In A. P. Cowie (Ed.) *Phraseology*. (pp. 161-186). Oxford: Oxford University Press.
- James, C. (1998). *Errors in Language Learning and Use: Exploring Error Analysis*. London: Longman.
- Kemmer, S., & Barlow, M. (2000). Introduction: A usage-based conception of language. In M. Barlow & S. Kemmer (Eds.), *Usage-Based Models of Language*, (pp. vii-xxviii). Stanford: CSLI.
- Kjellmer, G.. (1991). A mint of phrases. In K. Aijmer, & Altenberg, B. (Eds.), *English Corpus Linguistics*. (pp. 111-127). London: Longman.
- Kuiper, K., & Lin, D. T. G. (1989). Cultural congruence and conflict in the acquisition of formulae in a second language. In O. Garcia, & Otheguy, R. (Eds.), *English across Cultures, Cultures across English*. (pp. 281-304). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lehrer, A. (1974). *Semantic fields and lexical structure*. Amsterdam: North Holland Publishing Company.

- Lewis, M. (1993). *The Lexical Approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- Lewis, M. (1997). *Implementing the Lexical Approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- Lewis, M. (Ed.) *Teaching Collocation: Further Development in the Lexical Approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- Macwhinney, B. (2001). Emergentist approaches to language. In J. Bybee, & Hopper, P. (Eds.), *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*. (pp. 449-470). Amsterdam: John Benjamins.
- Nesselhaf, N. (2003). The Use of Collocations by Advanced Learners of English and Some Implications for Teaching. *Applied Linguistics*, 24(2), 223-242.
- Nesselhaf, N. (2005). *Collocations in a Learner Corpus*. Amsterdam: John Benjamins.
- Pawley, A., & Syder, F. H. (1983). Two puzzles for linguistic theory: nativelike selection and nativelike frequency. In J. C. Richards, & Schmidt, R. W. (Eds.), *Language and Communication*. (pp. 191-226). London: Longman.
- Peters, A. (1983). *The Units of Language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shei, C.C., & Pain, H. (2000). An ESL writer's Collocational aid. *Computer Assisted Language Learning*, 13(2), 167-182.
- Singleton, D. (2000). *Language and the lexicon: an introduction*. London: Arnold.
- Sosa, A. V., & MacFarlane, J. (2002). Evidence for frequency-based constituents in the mental lexicon: collocations involving the word *of*. *Brain and Language*, 83, 227-236.
- Townsend, D. J., & Bever, T. G.. (2001). *Sentence Comprehension: The Integration of Habits and Rules*. Cambridge: The MIT Press.
- Underwood, G., Schmitt, N., & Galpin, A. (2004). The eyes have it: An eye-movement study into the processing of formulaic sequences. In Schmitt, N. (Ed.), *Formulaic Sequences*. (pp. 153-172). Amsterdam: John Benjamins.
- Van Lancker, D. (1975). *Heterogeneity in Language and Speech: Neurolinguistics Studies*. Los Angeles: University of California.
- Van Lancker, D. S., (2004). When novel sentences spoken or heard for the first time in the history of the universe are not enough: toward a dual-process model of language. *International Journal of Language & Communication Disorders*, 39(1), 1-44.
- Whorf, B. L. (1939). The relation of habitual thought and behavior to language. In Spier, L. (Ed.), *Language, culture, and personality*. (pp. 75-93). Wisconsin: Sapir Memorial Publication Fund. [Reprinted in Carroll, J. B. (Ed.) (1956). *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. (pp. 134-159). Massachusetts: the MIT Press.]
- Woolard, G. (2000). Collocation - encouraging learner independence. In M. Lewis (Ed.), *Teaching Collocation: Further Development in the Lexical Approach*. (pp. 28-46). Hove: Language Teaching Publications.
- Wray, A., & Perkins, M. R. (2000). The functions of formulaic language: an integrated model. *Language and Communication*, 20, 1-28.
- Wray, A. (2002). *Formulaic Language and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 田中茂範 (1990). 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』 東京: 三友社
- 松野和子・杉浦正利 (2004). 「コロケーションの定義 —コロケーションの概念と判定基準に関する考察—」 [研究代表者 杉浦正利, 平成13年度～15年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書, 『なぜ英語母語話者は英語学習者が話すのを聞いてすぐに母語話者ではないとわかるのか』 (課題番号 13610563) pp. 79-95]
- 松野和子 (2014). 「コロケーションの定義に関する再考」 『静岡大学教育研究』 第10号, 67-81.